



ユーザー訪問 くぬぎ薬局 ● 福岡県大牟田市

服薬指導支援システム「Navity」を活用し 詳細な安全性チェックを実施

服薬指導を重視する福岡県大牟田市のくぬぎ薬局では、電子薬歴としての基本機能だけではなく、服薬指導に役立つツールを多く搭載した(株)EMシステムズの服薬指導支援システム「Navity」を導入。その有用点は「詳細な安全性チェックが可能」「患者データの一貫した管理が可能」「薬歴の質向上、内容の充実が図れる」であるとし、積極的に活用している。



薬の正しい知識など、地域住民への啓蒙に努めるくぬぎ薬局

“顔の見える薬剤師”として 親身になった服薬指導に注力

「あなたの服薬指導を聞いて非常にためになった。その通りやったらよかったよ、と患者さんから言われたとき、薬剤師冥利に尽きると感じます」と語るのは、福岡県大牟田市を中心に4店舗の薬局を運営する不知火メディクス(本社：大牟田市大字今山)社長の工藤克己氏。同氏は長らく総合病院で薬剤師として勤務、1993年に独立して松林堂薬局(熊本県玉名郡)を開局し、その後、大牟田市にセンター薬局、つばき薬局を立ち上げ、昨年10月には同市東部に位置する総合病院の門前薬局としてくぬぎ薬局をオープンした。

大牟田市の高齢化率は全国平均に比べて7%も上回り、27%に達している。また、かつて炭鉱町であったことから、当時の大気汚染の影響で今も呼吸器疾患に苦しむ高齢の患者さんが数多く存在する。高齢者の場合、1人に多種の薬剤を処方されることが多いため、患者さんの要望を聞きながら一包装包装を実施しているという。

現在、くぬぎ薬局の処方せん応需数は1カ月で約5,000枚。それを薬剤師9人(うちパート2人)、事務7人(うちパート5人)で対応している。医薬品の備蓄は約800品目で、その中には漢方薬も多い。近隣の総合病院に漢方薬処方豊富な経験を持つ医師がおり、また工藤氏自身も漢方薬の研究を積み重ね、西洋薬で副作用が顕著に現れるときや機能的疾患などのケースで、漢方薬が役立つことを知っているからだ。この例に限らず、月に1回、病院の管理者と情報交換を含め、問題点を整理して「病・薬連携」の強化に努めており、医師との良好なコミュニケーションが築かれている。

また、“顔の見える薬剤師活動”として、市の健康づくり市民大会、健康友の会、医療懇談会に積極的に参加し、薬やサプリメントについての正しい考え方・飲み方などの啓蒙に努めて

いるそうだ。さらに、在宅訪問服薬指導への積極的な取り組み、薬剤師をめざす高校生や薬学生の研修受け入れなど、意欲的な活動が目立つ。

服薬指導にも注力しており、そこにも一人ひとりの薬剤師が“顔の見える”かたちで親身になって対応する姿勢が見える。それをサポートするツールとして採用に踏み切ったのが、EMシステムズの服薬指導支援システム「Navity」である。



不知火メディクス社長兼くぬぎ薬局
管理薬剤師、工藤克己氏

チェック欄の記載で申し送りができ、 指導内容の連続性・一貫性が図れる

くぬぎ薬局の開局時、スペースを有効活用するために、薬歴庫が不要な電子薬歴の導入を決定した。手書きによる誤字・誤読への不安を払拭する意味もあった。すでにEMシステムズのレセコン「Recepty」を全店舗で活用していたが、即「Navity」に決めたわけではなく、複数の電子薬歴システムを検討し、知人の薬剤師に相談するなどした結果、「『Navity』なら問題ない」と工藤氏は判断した。

「Navity」は、電子薬歴としての基本機能だけではなく、服薬指導に役立つツールを多く搭載した「服薬指導(薬剤師)支援タイプ」。1年間の活用を振り返って、その有用性は3点に大きくまとめられる、と工藤氏は指摘する。

「第一に、詳細な安全性チェックが可能であること。薬品(医療用、OTC薬)・飲食物との相互作用、副作用情報が詳細に得られます。第二に、患者さんのデータの一貫した管理が可能なこと。バイタルサイン、検査値をお聞きしたときはすべて入力していますが、簡単にグラフ化できるので、わかりやすい管理が可能です。第三に、薬歴の質向上、内容の充実が図れること。POSの概念に基づいてSOAP形式による薬歴記載がスムーズにできます。文言集の登録により、薬歴記載の省力化が可能ですし、特に、チェック欄の記載で次回への申し送りができ、指導内容の連続性・一貫性が図れる点は、本当に助かっています」

パソコンの習熟度に個人差があるため、入力速度の向上が課題としつつも、「Navity」の有用性に手応えを感じている工藤氏は、今後全店で導入する意向を示している。



くぬぎ薬局では服薬指導支援システム「Navity」の積極的な活用を図っている